

ふれあい・コンタクト

動物と出会い、人と触れ合っ心ときめきをコーディネートするために

円山動物園ボランティア会
代表世話役 竹尾 昌己

ニュースレター

<平成23年度の活動に当たり=ご挨拶=>

ボランティア会代表世話役 竹尾昌己

平成 23 年度の代表世話役に再選されましたので、どうか宜しく願い致します。

今年度は 79 名でのスタートとなりますが、動物園では今のところボランティアは募集しないとの事なので、少数精鋭でガイドやイベントをこなして行きたいと思えます。ところで皆さんが日頃行っているポイントガイドやイベントの参加が、皆さんの脳を活性化し、ひとの輪を生み、生活の質を高め、積極的な生き方につながっているのを、ご存知でしょうか。ガイドは心と体の健康に大変良いそうです。その事を十分認識してボランティアを続けてください。

ガイドで心がけてほしいのは、ガイドをしてやるんだと言うのではなく、ガイドをさせて頂くと言う気持ちで行うことが大切です。それが「おもてなし日本一」に繋がります。いずれにしても 13 年目を迎えるボランティア会は、今では動物園にとって、無くてはならない存在として成長してきています。その誇りを持ち来園者に愛されるボランティアとして、今年も明るく楽しく活動しましょう。



円山動物園園長 酒井裕司

ボランティア会の皆様、日頃より円山動物園に多大なるご協力及びご支援を頂きまして誠に有り難うございます。円山動物園は 5 月 5 日をもちまして、満 60 周年を迎えました。開園以来、当園は市民・道民の動物園として親しまれ愛されてまいりました。昨年のあるアンケートによれば、当園を訪れる 90 %が市内・道内からのお客様であり、また 60 %の方が年 2 回以上来園されるリピーターという結果でした。このことから当園が市民・道民にとって、いかに身近な存在であるかが分かります。参考までに旭山動物園は、道内客 23 %、リピーター率 16 %といわれています。リピーター率の上昇とともに「動物のことをもっと知りたい」という来園者が 80 %と、学びの高まりも見せてきています。私たち円山動物園は 60 周年の本年、分かりやすい動物説明表示やドキドキ体験メニューの充実に、より一層力を注ぎながら、ボランティア会のみならず一緒に「おもてなし」の心を持って、市民・道民の「学びのお手伝い」に磨きをかけて参りたいと思えます。そして、4 月に公開したホッキョクグマの赤ちゃんを始め、今年も多くの新しい命の誕生が期待されます。未曾有の大震災後のうつむきがちな世相の中、人々に少しでも多くの明るさと元気をお裾分けできるよう、ともに協力してまいります。震災、60 周年、新たな命。



<ボランティア会総会 開催される>

4 月 10 日、平成 23 年度のボランティア活動開始式と、総会が行なわれました。まず園長より、今年は 4 月に新は虫類館のオープンに始まり、開園 60 周年を迎える年であることから、百万人の入場者を目標にしているとの、ご挨拶がありました。その後、石橋獣医師から「獣医の仕事」についての講習がありました。「動物の治療にあたり、捕獲に網を使ったり、吹き矢を使ったり、しっぽを捕まえたり、目隠しをするとおとなしくなる動物もいる。」など、とても面白く話して下さいました。意外と危険の多いお仕事であることを再認識しました。新は虫類館は美術館のように美しい施設との事で、動物の種類も増え、益々勉強をしてお客様に喜んでいただけるガイドを目指そうと、決意しました。



総会での議題も全て承認され、新体制でスタートを切ることができました。

(やせい班 加藤啓子)

<今年ファミリーでお誕生会>

1月26日は『弟路郎』の14回目の誕生日。「弟路郎アニマルファミリー」が果物満載にトッピングしたデコレーションケーキをプレゼントしました。『弟路郎』は木の板で大好物を器用に取り出し大喜びで平らげました。『レンボー』と『ハヤト』もおすそ分けを頂き、『ハヤト』は吉田さんの手からブドウを愛くるしい顔で「アーン」をして口に入れてもらっていました。

『弟路郎』は今、人間で言えば「人生で一番元気の良い時期。パイパイが大好きだがドリアンも食べさせたい。『ハヤト』以外はダイエット中だが今日は特別」とのコメントが吉田さんからありました。『レンボー』と『ハヤト』と一緒に居られるのは、あと2年位とのこと。来年も又「お誕生会」を『弟路郎』のファミリーと共に、お祝い出来る事を楽しみにしています。
(ワイルド班 水戸久仁子)



<チリメンモンスターを探せ！>

1月早々の3日間、人気イベント「チリメンモンスターを探せ！」が実施されました。食卓の人気おかず、チリメンジャコは海で採取し加工前の時点では、沢山の小動物が混在しています。種々の稚魚やエビ、カニ等の幼生、時には珍品のタツノオトシゴの子供も混じっています。いずれも数ミリと小さく奇妙な形をしているものが多く、「チリメンモンスター」と名付けられています。これらを探し出し拡大鏡で見ながら、正体を図鑑で探し当てる楽しいイベントを当園で実施しています。今回も親子や若い恋人同士等が、怪しい物体をピンセットでつまみ出しては、「これは何だろう！」と目を輝かし、真剣に調べその正体分かると、「やったー！」と喜びの歓声です。大発見で気持ちはすでに生物学者です。
(やせい班 佐藤國男)

<『ナナコ』感謝イベント>

2月27日、マサイキリン『ナナコ』の感謝イベントが、アニマルファミリー15名が参加して開催されました。最初に田村飼育員さんより『ナナコ』の健康状態についてお話がありました。足の蹄の破損は『ユウマ』に追われた時に出来たとの事。『ナナコ』は神経質なところもあって思うように治療が出来なかったそうです。お話の後、京都から取り寄せた『ナナコ』の好物「カシの葉」を、手渡しで食べてもらい参加者一同大感激でした。次に餌場の見学では、あらためてキリンの背の高さにびっくりさせられました。『ナナコ』も来園時は体も小さく弱々しく感じられましたが、最近は少し大きくなって元気な様子になりました。二世誕生を期待しながら、1時間のご対面、触れあいは終了しました。そばで見た『ナナコ』は目が大きく睫毛が長く、とっても美人、『ユウマ』もイケメン、似合いのカップルですよネ～。
(ワイルド班 原百合子)



<『スノーフェスティバル』に参加して>

さっぽろ雪まつり協賛円山動物園60周年記念第5回スノーフェスティバルが、1月30日～2月13日まで行なわれました。ほぼ天候にも恵まれ、後半の一週間は入場料無料となり3万人もの入場者がありました。今回の目玉は、なんとと言っても一回300円で滑ることが出来た180mのチューブスライダーでした。親子よりはお爺ちゃん、お祖母ちゃんと孫の組み合わせで滑っていた方が、多かったように見えました。『キッドランド』跡地を利用し雪を運び、重機で積み上げ、足場を組み、見た事もない長いスライダーを完成させました。サル山の後方で作業が行なわれていたので、製作過程を楽しく眺めることが出来ました。収益金の一部は動物達の餌代になったそうです。園内ではJAL主催の企画、ジュニアダンス、子供達で作る雪像等沢山の催し物が行なわれました。「ドキドキ体験」も通常より多く開催され、ミニ雪だるま作りも大盛況でした。
(ワイルド班 星野恵子)

<イベント 『ミニ雪だるまづくり』>

スノーフェスティバルの一環行事、『ミニ雪だるまづくり』に2回目の参加、朝から張り切って行くも、先輩のボランティアさんもう来てる、早～～！流石ベテランの皆さん、手際の良い段取りに新米おたおた！当日は、晴天に恵まれ入園者の出足すこぶる快調。『札幌雪祭り雪像コンテスト』に参加のオランダチームの方や、観光で来られた韓国、中国の方々も一緒に雪だるまづくりを楽しむ。勿論札幌市民の来園者も親子で、家族で、カップルで一生懸命に作ってましたよ。ちょいと「国際交流」に笑顔・笑顔の輪。やはり動物好きは良い人ばかり。二日間で、300個以上の作品が完成。さりげなくお手伝いくださる園長さんやキーパーさんの姿に感謝感激！やはり「おもてなし日本一」の円山動物園ですね。心地よい疲れに、今日はビールが旨そう。ボランティアの皆さんお疲れ様でした。
(ワイルド班 鈴木文人)



私達ボランティアはイベントを開催するに当たり、色々な用具、道具、机、看板等々を必要とします。これらの資材を手当て、貸し出し、お手伝いをしてくれるのが動物園のなんでも屋、三上さんです。GW前でお忙しい中、楽しいトークをたっぷり伺いました。

Q 現在のお仕事に携わって何年ですか？ 昭和 64 年 1 月 1 日からで 23 年になります。職種は公園業務員です。とにかく緑に携わる仕事がしたくてこの仕事につきました。37 歳の時、札幌市職員となり、たまたま動物園勤務となりました。

Q 最初はどこを担当になったんですか？ いきなり熱帯植物館の担当をまかせられ、試行錯誤しながら 2,000 種ほどもある植物の一覧表をつくりました。実はこの時、花の名前はチューリップとバラくらいしか知りませんでした(笑)

Q 大工の腕もなかなかたそうですが？ 昔、洋蘭を寄贈されたことがあり、それを置く台を作ったのが初大工仕事です。その後、腕を見込まれてキリンの移動檻を作ったけれど、頑丈過ぎて重すぎて、トラックに積むことも出来ず、園内だけでしか使えませんでした。そのうち壊れてしまいました。(笑)

Q 印象に残っているお仕事は？ 正月のもちつきかな？ GW中は大変混雑します。来園者を安全にお迎えする準備は私の一大イベントです。それと、冬のイルミネーション作りは楽しいですよ。

Q 印象に残っている動物を教えてください。 やっぱり、象の『花子』と『リリー』かな？ 元気な姿と亡くなった姿、両方見ているのでね！

Q プライベートなことを聞かせてください。ご趣味は何ですか？ 若いころは、落語、演劇、アマチュア無線、ギター。今は海釣り、パークゴルフ。あとは・・・お酒。

インタビューを終えて。三上さんは家庭では 4 人のお子さんのお父さんです。次女夫婦は演劇を、長女はパントマイムをされていて、動物園でも何度か披露されているそうです。お父さんの DNA をしっかり受け継いでいるようです。そして動物園で働くまでに六つの仕事を経験したそうです。その色々な経験が今の仕事に役立っていて、「人生無駄なことは何も無い！」と言っていました。最後にボランティアに望まれることを何うと、「衰退しないで継続して欲しい」と、おっしゃっていました。私達ボランティアは、なにかにつけ三上さんを頼り、甘えてきました。この 3 月で定年となりましたが、嬉しいことに引き続き勤務されます。三上さん！又宜しくお願ひします。

(ふれあい班 高橋しのぶ 松山幸子)

<あれから10年>

広報さっぽろで円山動物園のガイドボランティアの募集を見つけて応募してから、早いもので 10 年が経ちました。おしゃべりのトレーニングがしたいと思っており、なおかつ動物好きの私は、「動物がたくさんいる場所で、おしゃべりのトレーニングがタダでできる！？なんて素晴らしいんだ！」そう思い、すぐに飛びつきました。実際には、話のトレーニングというところまではいかず、軽く世間話のようにお客さんとやり取りをし、動物を愛でて退園することがほとんどでした。でも、動物たちや景色を見て四季を感じ、円山動物園という札幌市民の財産を、肌身をもって体感するのも悪くは無いと思っています。サクラが咲き乱れる春、緑あふれる夏、どんぐりが転がる秋、そして北海道ならではの白く明るい冬。厳しい自然の中でたくましく生きる動物たち。これからも細々とではありますが、たくさんの方々と一緒に、円山動物園や動物たちのよさを伝えるお手伝いできればと思っています。(クマチカ班 加藤真奈美)



<2011・2012年は国際コウモリ年>

『BAT TRIP ぼくはコウモリ』の著者で野生生物写真家、中島宏章さんの講演『コウモリトーク』が 3 月 20 日動物園科学館で開催されました。コウモリは日本全国で 37 種、最も種類の多い哺乳類で道内では 19 種類が、確認されているそうです。写真は『ドーベントンコウモリ』(体重 5 ~ 10 g 北海道のみに生息)です。江別市内の水路の橋の下にドーベントンコウモリが数千匹群がっているのが発見されました。このコウモリは一晩に体重の半分、五百から千匹の蚊を捕食します。小さい体の割には大食で農作物を害虫被害から守っているそうです。又、食べ物の少ない冬場は、体温を 0℃まで下げて枯葉の中等で冬眠します。中島さんは 4 年間コウモリを発見できませんでしたが、一度発見してからは年に 150 回も確認できているそうです。身近にコウモリが存在していること自体知りませんでしたので、マンションの窓の網戸に、蝶のように止まっている姿に驚きました。後日写真展にも足を運び不思議な世界を堪能しました。きっと動物園の森でも発見できると思います。

(ワイルド班 田中一江)

<『ドン』パパ、寒いけれど食欲は旺盛>

12月19日カバの『ドン』のアニマルファミリーイベントが開催されました。餌を一食抜かれたせいか、ファミリーが置いたリンゴやカボチャをあっという間に、何時もの迫力で平らげる様子に、一同大喜びでした。
(ワイルド班 藤川徳子)



<11歳になりました>

私はシンリンオオカミの『キナコ』です。4月12日に11歳の誕生日を迎えました。ファミリーの皆さんからも祝ってもらったの。故郷北九州の到津の森公園から円山に来て9年。一緒に過ごした『アンコ』お姉ちゃんの死、最愛の夫『ジェイ』との出会い、そして愛息子『ルーク』の誕生、色々な事がありました。11歳を迎えるに当たり沢山の方々にお礼を言いたいです。私を産み、育ててくれた『チャンプ』お父さんと『ナッツ』お母さん、円山に来てから共に支えあった『アンコ』お姉さん、毎日私達の世話をしてくれる飼育員の弓山さん、お客さんに私達の魅力を伝えてくれるボランティアの皆さん、私達を応援し支えてくれるファミリーの皆さん、そして何より私の大切な夫『ジェイ』と息子の『ルーク』に「ありがとう！」
(やせい班 成田愛)

<ホッキョクグマ赤ちゃん公開>

3月11日、東日本を襲った巨大地震と大津波は、まさに想像を絶する大震災となり、加えて福島原発の事故は人々を恐怖と不安に陥れました。今なお被災者の方たちは、大きな心の傷を引きずりながら、懸命に復興を信じて苦難に立ち向かっています。衷心よりお見舞い申し上げます。



そんな中、昨年12月に誕生したホッキョクグマの赤ちゃんが、4月1日に一般公開され、沈んだ人々の顔に笑顔を取り戻してくれました。まだ名前も無く、性別も分かりませんが、ただ目の前にいるだけで心を癒してくれます。さすがに『ウラ』は子育てのベテランで安心感漂う親子の雰囲気は、微笑みを禁じえません。昨年道内4動物園はホッキョクグマの繁殖プロジェクトに取り組みましたが、成功したのは『ウラ』と『デナリ』ペアのみでした。でかしたよ『ウラ』！これからも勇気と感動を被災された方々へも、届けてほしいと切に願わずには居られません。本当に有難う『ウラ』。
(クマチカ班 三浦千代美)

=投函コーナー=



春だ！芽吹きだ！僕達も雪割りのお手伝い！

ヒソヒソ話「又引っ越し？」「今度は新築だ！」

目一杯河馬大欠伸紫雲英草(げんげそう)

「おい！何やってるの？」「ごめん！巣作りの材料が足りなくてね。」

(クマチカ班 山川泰弘)

(ふれあい班 西川明子)

(やせい班 谷口克美)

(ワイルド班 田中茂雄)

編集後記

人間のおごりに警鐘を鳴らし続けていた“自然”は、とうとう堪忍袋の緒を切らし“自然の底力”を見せ付けたのが、今回の大震災であったのだろうか。人間の知恵の浅はかさをあざ笑うようなその姿に、ただただ唾然とさせられた。被災者にはお見舞い申し上げると共に、一日も早く復興をお祈り致します。防災だけでなく“自然との共生”を今一度考えてみたいと思います。(次回原稿締め切りは7月16日です)

編集スタッフ：小能 瞳 松山幸子 高橋しのぶ 大地 淳 田中茂雄 田中一江 星原恵子 水戸久仁子 山川泰弘
小松久恭 成田 愛 加藤啓子
編集責任者：鳥山 要 (TEL/FAX 011-621-8022) 丹野健治 佐藤正俊